

# 教課審答申

## — そのポイントと解説 —

### 「子どもが輝き・子どもの学びが生きる」教育課程の改善

高田喜久司

上越教育大学教授



#### 1 ● 「子どもが輝き・子どもの学びが生きる」カリキュラムへの期待

二〇〇二年度からの完全学校週五日制導入に向けて、カリキュラムの見直しを進めていた文相の諮問機関、教育課程審議会（「教課審」）は平成十年七月二十九日、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」を答申し公表した。

教育課程の基準の改善は一年ぶりのことであるが、今回の答申を端的に言えば、「子どもが輝き・子どもの学びが生きる」教育課程の改善方向を示唆したものと位置づけられよう。

それは戦後当初の教育改革にも匹敵する画期的な内容を含んだカリキュラム改革ともいえる。この答申には沈静化することのないじめ、不登校、校内暴力、さらには授業崩壊、子どもの新しい荒れ

の出現、学びから逃走する子どもの実情に対する危機意識の現れを読みとることができる。

文部省はこの答申を受け、小、中学校は年内、高校は本年度内に学習指導要領を改訂、小、中学校で二〇〇二年度、高校では二〇〇三年度の新入生から新教育課程による授業を行う。また教育課程改訂の時期だけに活動している同審議会の常設化も提言している。

ここではまず、答申内容のエッセンスを素描する。次に、教育課程改善の哲学ともいえる基本的な観点、特に「改善のねらい」の理解のしかた、いま求められる「学校像」、さらに「教育内容の厳選」の背景を確認しておきたい。そして最後に「教師」はいかにあるべきかを検討しよう。

## 2 ● 教課審「答申」内容のエッセンス

教課審の答申内容は多岐・多彩にわたっているが、ここでそのエッセンスを示すならば次のようになる。

第一は、「ゆとりの中で生きる力の育成」をめざし、小中高とも授業時間を週当たり二単位時間削減するとともに、基礎・基本を確実に身につけさせるため、現行の内容から約三割の削減を図ってスリム化した「教育内容の厳選」が注目される。

第二に、教育課程改善の目玉である新しいタイプの授業「総合的な学習の時間」（総合学習）を新設し、小学校三年から高校まで必修としたことも重要である。

教科の枠を越える国際理解、情報、環境、福祉・健康等といったテーマについて、自然体験や社会体験、観察・実験、見学や調査、発表・討論、体験的学習や問題解決的学習を重視する総合学習は、「考える力」を育成するうえでも有効であろう。授業内容や名称は各学校に任せるなど学校の主体性が

生かせる配慮になっていることも無視しえない。

第三に、答申を貫く特徴として「教育課程の基準の大綱化・弾力化」を図って各学校の創意工夫・裁量の余地を広げていることである。その一例として総合学習や個性重視の教育を行うためには、「児童生徒の実態、地域の実情を踏まえて、各学校が創意工夫を存分に生かした特色ある教育活動を展開すること」が重要であるといい、さらに「各学校段階の各教科等の特性に応じて、目標や内容を複数学年まとめて示したり、各学校の特色に応じ、また児童生徒の興味・関心等に応じ、選択できる幅を広げたりするなどの大綱化や弾力化を図る必要がある」とうたっている。

また、各学校が創意工夫を生かして一層弾力的に日課表や時間割を編成する「時間割の弾力化」を図ることを要請している。

第四に、学習活動の展開にあたっては、多くの知識を教え込むことになりがちだった従来型の教育から「自ら学び自ら考える力」を育成する教育への転換を図ることが提言された。そのために知識と生活の結びつき、すなわち「知の総合化」の視点を重視し、各教科等で体験的・問題解決的な学習や学び方の育成を重視する学習などを活発に行う配慮がより大切になる。

第五に、「道徳教育」や「特別活動」では、特にボランティア体験や自然体験などの体験活動を積極的に取り入れること、また人間関係づくりなどを重視し、社会生活上のルールや基本的モラルなど実践的な態度を培うことを打ちだしている。

また、日の丸、君が代については、特別活動で「国旗と国歌の指導の徹底を図る」と表現をより強めた。

第六に、現行の選択教科の「英語」について、中高校では必修教科に組み入れられたこと。また小学校では総合学習の中で、国際理解の一環として外国語会話を認めたが、「外国の文化に慣れ親しむな

ど、小学校段階にふさわしい体験的な学習活動」が望ましいとしたことを銘記すべきである。

第七に、「情報」については、高校で必修教科として新設したほか、高度情報化社会を踏まえ、小学校から各段階に応じてコンピュータや情報ネットワークの活用などを教えることを盛り込んでいる。答申内容のエッセンスを素描してきて二一世紀の学校教育の基本は、「子ども」を前面（全面）に押しだした構想だと理解することができよう。

本来、子どものために学校があり、子どもが学校の主役であつたはずである。学校は子どもの学びの場であり生活の場でなければならない。これからの学校は徹底して子どもの立場に立ち、一人ひとりの子どもに居場所や存在価値を認めてやり、自己実現を図りつつ「生きる力」を体得させるものでなければならない。「学ぶのは子どもだ」という教育の原点を再確認し、有効な学習活動を展開する必要がある。

「子どもが輝き、子どもの学びが生きるカリキュラム」と称するゆえんである。

### 3 ● 教育課程改善の基本的観点

#### (1) 「改善のねらい」の「全体構造的理解」

教課審は子どもの実態、教育課程実施の状況、社会の変化などを分析し検討するとともに、「教育課程の基準の改善のねらい」四項目を次のように定めた。

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること
- ③ ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実

すること

④ 各学校が創意工夫を生かして特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること

これらの「改善のねらい」は羅列的なものと解するか否か、ねらい相互の関係、順序性や構造等について、活発な論議の展開が予想される。

まず四項目のねらいのうち②と③は、ほぼいわゆる「新学力観」を表現したものであり、現行学習指導要領の「総則」にも取り入れられ、ことさら新しいねらいとはいえないであろう。

次に④は、「中間まとめ」の段階において「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育を展開すること」となっており、答申ではそれに加えて「特色ある学校づくり」が明記されていることに留意しなければならぬ。今後は各学校や各教師の創意工夫を生かした「特色ある教育」と「特色ある学校づくり」が問われるのである。その意味で④のねらいは、①②③の教育活動を展開する際にも、常に考慮する必要がある全体に底流する統合的・基底的な性質を有するといえる。

さらにこれら四項目は、二つに分けて理解することが可能である。すなわち、①と②は変化の激しい時代に育成されるべき「子ども像」（本質的目標）を意味し、③と④はそれを実現するための「学校や教師」（具体的方策）に焦点づけられていると解されるからである。

また、①の「豊かな人間性・社会性」は、②の「自ら学び自ら考える力」なくして育成されえないように、ともに密接不離の関係にある。

このように「改善のねらい」は決して断片的で羅列したものではない。したがって全体構造的な理解が、今後一層求められるであろう。

(2) いま、求められる「学校像」

今回の答申で高く評価したい点は、「教育」あるいは「学校」についての定義や説明が具体的になさ



れていることである。

各教師は「改善のねらい」を理解するにあたって、その前提となる「改善の基本的な考え方」の十分な把握が必要になる。

例えば、「教育は、子どもたちの発達を扶ける営みである」と明確に定義づけるとともに、学校像あるいはこれからの学校への期待についての言及がみられる。

すなわち、学校では学ぶことの動機づけや学び方の育成を重視し、さらに学校のあり方について、おおむね次のように提言した。

具体的に学校は、①子どもたちにとって伸び伸びと過ごせる楽しい場、②自分の興味・関心のあることにじっくりと取り組めるゆとりのある場、③分かりやすい授業が展開されて、分からないことが自然に分からないと言え、学習につまづいたり、試行錯誤したりすることが当然のこととして受け入れられる学校、④これらの基盤として、雰囲気は温かく安心して自分の力を発揮できる場、⑤かけがえのない一人の人間として大切にされ、頼りにされていることが実感でき、存在感と自己実現の喜びを味わう場でなければならない。

完全学校週五日制下で、こうした学校像の実現をめざして各学校は家庭、地域社会との連携・協働のあり方を探りつつ、抜本的な学校改善に早急に取り組む体制づくりが肝要となろう。

### (3) 「教育内容の厳選」が強調される背景

「教育内容の厳選」は教育課程改革の大きな流れであり、その例示は画期的であると評価されよう。答申は、①子どもたちにとって理解が困難であったり高度な内容、②単なる知識の伝達や暗記に陥りがちな内容、③各学校段階又は各学年間、各教科間で重複する内容、④学校外活動や将来の社会生活で身に付けることが適当な内容—などについて、削除、上級学校への移行統合、取り扱いの軽減な

どにより、授業時間の縮減（小学校算数で一四％）以上に教育内容を厳選した（小学校の算数で三〇％）と述べている。

厳選の具体的な例として「算数、数学」については次のようである。

小学校では、「数と計算」に重点をおく。①柱体と錐体の表面積、②台同や対称、③縮図や拡大図、④錐体などの立体図形、⑤文字式、比例や反比例の式——などを中学校に移行統合する。小数や分数の導入を三年から四年に移行し、①不等号の式の内容、②台形と多面体の面積、正多面体、③度数分布——などは削除。けた数の大きい整数や小数の計算、帯分数を含む複雑な計算などは軽減する。

中学校では、①一元一次不等式、②二次方程式の解の公式、③円の性質の一部、④三角形の重心、⑤資料の整理や標本調査——などを高校に移行統合。文字を用いた式の計算を軽減し、相似を上級学年に移す。二進法など数の表現は削除する。

ではなぜ、教育内容を厳選しなければならないのか。この問いかけは「教育課程の基準の改善」をその本質において理解するために重要である。

第一は、完全学校週五日制になった場合、当然のこととして授業時数の縮減が迫られること、そのためには授業時数に見合った教育内容の削減や厳選が不可欠であるという構図が考えられる。

第二は、より積極的な理由に由来するものである。すなわち「生きる力」を育む授業の実現には「時間的なゆとり」もさることながら、考えるゆとり、試行錯誤できるゆとり、さらには心のゆとりなど「精神的なゆとり」がなければならず、このゆとりを生み出すためには「教育内容の厳選」が必至の課題となるという考え方に基づいたものである。

「あまりにも多くのことを教えるな。教えるべきことは徹底的に教えよ」。このスローガンは学習指導の鉄則を示すものであり、教育内容厳選の基本理念を示唆しているのである。

したがって、子どもの生きる力と無関係な内容であればその脱落を恐れるなという「すき間への勇氣」、逆に生きる力に重要な意味がある基礎・基本については徹底的に学ばせるという「徹底性への勇氣」をスローガンに掲げた範例方式の精神は、教育内容の厳選を実質化する教師の構えを喚起するうえで今日、特に有効である。

## 4 ● 教師の意識改革の必要性

### (1) 問われる教師の力量

すでに触れたように、教育課程の基準の大綱化・弾力化や「総合的な学習の時間」の新設など、答申は学校や教師の創意工夫を一段と求めている。新聞界がこぞって、「問われる教師の力量」「教師に発想の転換迫る」「先生はバランス感覚必要」「問われる学校の創意」と報じたことは理由のないことではない。

問題山積の学校の将来は、まさに「教育は教師しだいである」という古きテーゼを再確認することがスタートとなる。教師が変われば、子どもの学びも学校も変わるのである。教師の意識改革を標榜するゆえんである。

### (2) 閉鎖的な学校からの脱却を

既存の体制や権威が次々と崩壊する急激な変動社会の中にあって、学校は相変わらず、古い絶対的な体質を保持しているかのようと思われる。特に、学校の閉鎖性、教育内容・方法・組織形態の画一性や硬直性が指摘され、学校は子どもにとって温もりのある存在ではなくなったといわれる。むしろ息苦しく閉塞感が強いのである。



また、熱心な多くの教師が多忙な日常のなかに身を置き、悪戦苦闘しているにもかかわらず、学校や教師への信頼は低下している。もはや学校は聖域ではなくなった現れ、といえよう。

よく「学校改革の波、校門を入らず」と指摘される。これでは教育課程の改善はおぼつかないし、社会から信頼される教師や学校とも無縁である。例えば、「基礎・基本」は四〇年前、「ゆとりと充実」は二〇年前、「自己教育力」の育成は一五年前に提言されたにもかかわらず、教育現場には徹底していないという批判もあるほどである。

こうした学校の否定的状況を踏まえて、ゆとりのなかで生きる力を育成する教育課程の改善が意図されたことを想起しなければならない。各学校は画一性・閉鎖性から脱却し、知識を教える教育から自ら学び自ら考える教育への転換を図り、家庭・地域社会と十分に連携し、バランスよく教育にあたることが重要なのである。

### (3) 鋭敏な教育的センスをもつ教師

教育は「不易と流行」との両面を統一する営みである。教師は時代を超えて変わらない価値あるもの（不易）と同時に、変わりゆく社会・変わりゆく子どもの実情（流行）に無力であってはならない。

特に、今次のカリキュラム改革において教師は、不易と流行を視野に、発想の転換を図って、どのような学校像や子ども像をイメージし、子どもの「学び」を生かした「私のカリキュラム」をデザインできるか、その鋭敏なセンスが問われているのである。

そのための対応課題としては「教育課程の基準の改善」のエッセンスについて校内研修や自己研修によってまず、共通理解を図りつつ、さらに自分なりの理論的基盤を固めておくことが肝要であろう。そのうえで実行可能なものについては主体的、積極的な取り組みを開始することが望まれるのである。

（たかだ きくじ）